

ラビュリントスの預言者

——Inspired to Jorge Luis Borges And Hyakken Uchida

入り組んだ階段、何千枚もの真鍮の扉、冷たい石の回廊——それが、わたしを取り巻く風景の全てであった。偏執狂的な幾何学の計算によって構築された、この忌々しい建物——それは一個の宇宙を思わせるものだ。その、まるで騙し絵のような世界の中心で（と言っても、わたしが現在いる場所を便宜的に「中心」と呼んでいるのに過ぎないのだが）、わたしはずっと立ち往生している。一体、わたしの憂鬱が晴れる日は、本当にやって来るのだろうか？

わたしは寝台に身を横たえ、煮詰まった考えをもう一度煮詰めている。寝室の壁に埋め込まれた鏡に、わたしの姿が映っている。身を支えるのには些か華奢すぎる四肢——それは痩せた牛の脚だ。薄茶色がかった背中の中毛並み——それもまた、牛のものである。そして長らく太陽光線を浴びていないため、病的な程に青白い顔——これは、年端もいかぬ人間のものだ。痩せ牛の体軀に、貧相な人間の頭が生えている——それがわたしの姿である。

わたしの母親は、かつてポセイドンの呪いによって白い雄牛に恋い焦がれるようになり、そして一頭（一人？）の怪物を産んだ。「雷光」を意味する「アステリオン」なる荘厳な響きの名前を与えられたその息子は、牛の頭を持ち、人の頭を持っていたという。すなわち、わたしの兄である彼は、わたしと丁度正反対の身体的特徴を有していたのである——わたしは頭が人間、体が牛である。

荒くれ者だった兄は成長するにしたがって周囲の人間たちを悩ませるようになり、ついには宮殿に幽閉されることになった。その宮殿はダイダロスなる職人に特別に作らせたもので、一度足を踏み入れれば二度と出られない複雑怪奇な構造を持つ建築物であった。

人肉嗜好者であった兄の食料として、九年に一度、男七人・女七人・計十四人の人間が宮殿の中に押し込まれた。兄はその人間たちを無残に喰い殺したという話だ。しかし三度目の生贄の中に、アテナイから来たテセウスという男が紛れ込んでいた。彼は兄を退治すべく宮殿に乗り込んだのだった。

死闘の末、わたしの兄はテセウスの剣に倒れた。そしてテセウスはと言うと、長い糸を道しるべとして用い、無事に宮殿から脱出することが出来たのだった。その糸を提供したのが、他ならぬわたしの姉、アリアドネであった（彼女は我々の兄弟のうちでは珍しい、純潔の人間であった）。

時が経ち、そんな物語もありふれた英雄譚、耳に馴染みのよい伝説として語り継がれるようになり、二十八人もの生贄を喰い殺したわたしの兄も単なる「かませ犬」として人々の記憶に留まるようになった。しかし、このおぞましい歴史はまたぞろ繰り返されようと

していたのである。わたしの母親——いや、その女のことを「わたしの母親」などと呼ぶことはもう止めよう。わたしは彼女を母として慕ったことなど一度足りとも無かったのだから——王妃パシパエにとつて、この悲劇はまだ完結していなかったのである。

パシパエにかけられた呪いはすでに消滅していた。しかし、白く美しい雄牛との燃え上がるような恋——それはポセイドンの偉大なる力も手伝っていたせいか、あるいは禁忌の愛であることが作用したのだろうか、彼女がそれまでの生涯において経験してきたどの恋愛よりも烈しく、狂おしく、情熱的であつた——その特別な恋の記憶は、彼女の心臓の奥深くにしっかりと刻み込まれていた。呪いから覚めたパシパエは、自分が牛頭人身の忌まわしい怪物（わたしの兄だが）を産んでしまったこと、そしてそのため多くの人間たちが生贄としてその命を無下に奪われてしまったことに恐怖を覚え、深い自責の念に苛まれたものである。しかし、そんな彼女の殊勝な後悔も、あの倒錯した幸福の記憶に比べれば微々たるものであつた。パシパエは陶然として思い起こすのであつた——自ら牛の模型の中に身を潜め、美しき白い雄牛に近づき、初めて睦まじく語り明かした夜、あの運命の夜のことを。パシパエは、その甘美な記憶の再現を渴望した。偉大なるポセイドンの呪いよりも根深く恐ろしいもの、それは一人の薄弱な人間の恋情だったのである。そしてついにある寝苦しい夜、パシパエは再び模型の中に潜り込んだのであつた（余談だが、その模型を作つた職人は他ならぬダイダロス、兄を幽閉した宮殿を建造したあの男である）。

その結果として、わたしが生まれた。わたしは兄とは違つて大人しく、決して暴力など振るわなかつた。また、兄の人肉嗜好（恐らく、彼が疎まれた最大の理由がこれであろう）も、わたしには受け継がれなかつた——それ以前に、わたしは「何かを食べる」という行為それ自体に無関心であり、不可思議なことに何も食えずにいても空腹を感じず、飢えもしなかつた。

しかし、わたしの父およびパシパエは、わたしに恐怖の念を抱いていた。兄の時のトラウマが、彼らの内に甦つたのだ。またしても化け物が生まれてしまった——頭が人間、体が牛などという、不愉快極まりない怪物が。

そしてわたしは先例にのっとり、宮殿に幽閉されることになつたのである——わたしは糸玉を持つていないかどうか嚴重にチェックを受けた後、かつて兄が暮らしそして死んだ場所である、あのわけのわからない構造の建物に押し込められたのだった。

わたしは一切抵抗しようとしなかつた。わたしは兄とは違つて血の気の少ない方であつたし、わたしを取り巻いている無情で無慈悲な人間たちと争うなど、この上なく無益なことと思われたからだ。それに、人間たちの間に在つて、謂れのない避難や侮蔑を受けながら生きてゆくよりも、完全に世間から隔絶されて暮らす方が、よほど気が楽であるようにも感じられた（わたしはかなり幼いころから厭世家だったのである）。わたしは——幾分引きつてはいたものの——顔に微笑みを浮かべ、どうどうと迷宮の中へ入つて行つたものである。それがわたしと人間界との訣別であり、以後わたしは今に至るまで外に出たことがない。

こうして先例通りわたしは宮殿に幽閉され、そして先例通りに生贄が捧げられることになった。だが前にも述べた通り、わたしは人肉嗜好を持たないばかりか、食事の習慣すら持っていなかった。そこでわたしは生贄の一团が到着するなり、慈愛に満ちた微笑みでもって彼らを迎え、彼らを安心させるためこのように告げた——君たちを傷つける気は毛頭無い。ましてや喰い殺す気など全く無い。

しかし、これは完全に無駄な宣言であった。彼らは二度と戻れぬ迷宮に放り込まれたことへの絶望感と、おぞましい姿の怪物を目の前にしたことへの恐怖感からすでに発狂状態にあり、わたしの話をまともに聞こうという者など皆無だったのである。ある者たちは蜘蛛の子を散らすように逃げ惑い、ある者たちは泡を噴き出して失神した。中には、「そうやって油断させておいて喰う魂胆だろう、お前みたいな醜い化け物の言うことなど、信用出来るものか！」と悪態をつき、おぞましい半獣半人に殺されるぐらいならいっそ、と言わんばかりに自ら舌を噛み切り、絶命する者さえいた。

わたしは絶望した——おそらく、生贄たちの感じているそれと同じくらいに。わたしは長い時間をかけて宮殿の中を巡り、逃げ出した生贄たちを探して回った。階段で足を滑らせて頭から転落し、命を落としている者もいた。行き止まりの壁を殴りつける恰好のままでは息絶えている者もいた。錯乱のためか、はたまた食料の無いこの宮殿において、最後の手段を用いて飢えを凌ごうとしたためか（かつてわたしの兄がそうしたように）、互いに傷つけ合い、噛み付き合いながら倒れ伏していた者たちもいた。わたしは彼らの亡骸を発見する度、脊髄が凍てつき、全身に鳥肌が立つ思いがした。話に聞かされていた兄のおぞましき、そしてわたし自身のおぞましきと比べ、決して劣っているように思えないほどにおぞましい光景が眼前に展開していた。それも、直接手を下してはいないとは言え、わたし一人のせいで現出した地獄絵図なのだった。

意図していなかったとは言え、幾つの命を奪ってしまったことだろう。結果的には、わたしは兄と同じ所業をしてしまったことになる。背徳に対する恐怖が、わたしの中に湧き上がって行くのが分かった。

何故わたしは生れて来たのか。見ず知らずの他者を不幸にし、そして自分自身をも不幸にするためなのか？生贄たちの打ちひしがれて青ざめた顔——それはあつと言う間に腐食し、そして干からびていった——を見遣りながら、わたしはいつ果てるとも無い思弁の闇の底へ沈んで行くのであった。

十四人の生贄全員が息絶えてから、どれぐらいの月日が流れただろうか。ある日、わたしはいつものように思弁の闇の中を漂っていたのだが、ふと脳髓に疲れを感じて眠りに落ち、そして夢を見た。それは身の毛もよだつような悪夢で、直にわたしは自分の叫び声によって目を覚ます羽目になった。止めどなく噴き出る冷たい汗で凍傷になるかと思いがら、わたしはその恐ろしい夢を頭の中で反芻した。そして突然、つい先程まで続いていた

思弁の答えが見出されたことに気がついた。

わたしが見た夢というのは、今からそう遠くない未来におけるこの世界の姿であった。それが何時のことかはわからない、しかし、いずれ必ず起こるだろう凶事の顛末をわたしは眠りの中で目撃したのである。わたしは心臓の痙攣を必死で押し止めながら、自分がこの世に生を受けた理由を悟った感動と、果たすべき我が使命への畏怖の念をどうにかして自分の中に位置付けようと躍起になっていた。わたしは宇宙の宣託を伝えるため、預言者としてこの世界に生を受けたのだ。

問題は、どうやってこの夢を人々に伝えるべきなのか、この強靱にして複雑怪奇な宮殿の外に住む、幾千億という人々に――。最初は、自ら外界に赴くことを試みた（よくよく考えてみれば、この迷宮から脱出しようとしたのはその時が初めてであった）。しかしそれは徒労に終わった。三日三晩わたしは宮殿の中をぐるぐると歩き続けたものの、四日目にとある真鍮の扉を押し開いた時、わたしがいつも暮らしている馴染みの寝室に行き着いてしまった。わたしは疲労と失望に押し潰されて寝台に横臥し、やはりこの計画には誰か他の者の助けが必要不可欠だと確信した。すなわち、次に生贄としてやって来る一団に協力してもらい、みんなで出口を探すより他はない。

わたしは生贄たちがやって来るのを渴望した。渴望しながら過ごす時間は途方も無く長く感じられた。永遠という概念を凌駕するほどに、その時間はだらだらと続いた。どれほどの歳月が流れたことだろう。その倦怠と焦燥の心情を、わたしはどうしても言い表すことが出来ない。

長く苦しい忍耐の後、ついに、運命の日が訪れた。

わたしは前回の失敗によつて得た教訓を生かし、まずは自分の姿を曝すことなく、壁の向うから彼らに呼び掛けてみた。これは一定の功を奏した。人間というものは、目に映る醜さを認めた途端にもう正常な判断が出来なくなってしまうものの、しかし醜さが巧妙に隠されていれば、彼らはそれなりに落ち着いた態度でもってわたしと向き合えるようになったのである。

わたしは壁越しに彼らと対話した。彼らに詫び、彼らを慰め、その絶望に共感し、そしてわたし自身もまた犠牲者であり、彼らと同じような境遇にいるということを切々と訴えた。それは非常に根気のいる対話だったが、わたしの怪物らしからぬ誠実な態度や、空間の閉塞性や癒しような孤独感もあいまって、我々の間には壁越しに一種独特な信頼関係が生まれ始めた。

ある日、生贄たちは「こつちに来なさいよ」とわたしに呼び掛けた――わたしはやや躊躇した後、彼らの前に姿を現した。彼らはわたしの容貌を見て少なからず衝撃を受けていたようだが、同時にわたしを温かく迎えるつもりでもいるようだった。

わたしたちは彼らに感謝し、そしてとうとう予言を伝える決心を固めた。「ぜひとも貴方たちに聞いて頂きたい話がある」

わたしが凶夢の一部始終を語り終えた時、彼らは狐につままれたような表情をしていた。

無理もない話である。しかし最終的に彼らはわたしを信じ、いつか宮殿の外に出られたらば、必ずこの宣託をあまねく全ての人々に伝えると約束した。

「では、行こう」わたしは高らかに言った「手分けして出口を探すのだ、同胞よ」

こうして、受難の旅が始まった。我々は大ざっぱに三つのグループに分かれて、慎重な足取りで前進した。階段を上りそして降り、重たい扉を開き、回廊を歩き回り、調度品や壁に掛けられた絵によって隠されている抜け穴をくぐる――。狭苦しい通路だらけのこの宮殿は、広大な砂漠を思わせた。預言者としての使命感に燃えて出発した我々だったが、次第に重苦しい不安の影に肩を押さえ付けられるようになっていた。このままわたしたちは宮殿の中を堂々廻りしながら死んでゆくのだろうか。そして、よしんば外に出られたとして、この預言は受け入れられるのだろうか。一体、我々の背負ってしまったカルマが尽き、何らかの形で報われるような日が、果たして本当に訪れるのだろうか――。

一人、また一人と、飢えと疲労のため倒れる者が出て来た。しかし歩みを止めたところで、食料の無いこの宮殿の中にある限り、間近に迫っている死から逃れられる訳もなかった。その上、彼らの中には殉死の精神すら芽生えており、休むことなくがむしやらに前進を続けるのだった――そして力尽き、倒れてゆくのがあった。

やがて、わたしのグループは全滅した――わたし一頭を除いて。

残り二つのグループは、そう遠くないところで見つかった。みな一様に、命の炎が燃え尽きてしまっていた。

最後の一人の死体を宮殿内で発見した時、わたしは思わず一粒の涙をこぼした。生まれて初めて流した涙であった。わたしが生れて初めて流した涙は、わたしが生まれて初めて心を通わせた友人の最後の一人の上に落ち、そして蒸発していった。

再びわたしは、思索に耽る日々を送るようになった。自らの心臓の鼓動と息遣いの他には何一つ音のしない、歪められた静寂の空間の中で、わたしは自分を相手に対話が続けていた。――これは答えの出る対話であるのだろうか？――わたしは、どう落とし前をつければよいのであろうか？――何がわたしを生み出した？何故わたしは生れた？わたしは何者？――わたしは預言者？

クエスチョンマークを並べるうち、次第に、一つの像がわたしの中で形作られ始めた。それはわたしが本気で求めている者の姿であった。その像が何者なのか、直に知れた――わたしは、糸玉を手にした英雄を待ち詫びるようになったのである。すなわち、一度宮殿に入った後で、再び外の世界へ戻って行ける人物――かつてわたしの兄を殺したテセウスの再来を、わたしは渴望しているのだ。

歴史は繰り返す、と言う。わたしは、いつの日か必ず彼がやって来るだろうと確信している。そして、十分に理解している積りだ――彼の来訪が意味するものは、わたしの死に他ならぬことを。しかし、わたしは死を恐れない。恐れるに足りないのである。わたしは、もっと恐ろしいものと向き合って日々を生きているのだから。

片手に剣を、そしてもう片方の手に糸玉を持った英雄が、わたしの寝室に乗り込んで来た時——わたしは喜んで彼を迎え入れるだろう。そして、その剣さえも甘んじて受け入れよう。しかし、わたしの喉がわたしの血で塞がれてしまう前に、かの英雄に預言を伝えることだけは、必ず為さねばならない。もしそれが上手くゆけば、わたしは彼の帰り道——糸を巻き取りながら進む、孤独の旅路——の安全を祈りつつ目を閉じるだろう。その時、ようやくわたしは満ち足りた気分です眠りに就けることだろう。その日が来るのを、わたしは心待ちにしているのだ。

※補記

ボルヘスの短編小説「アステリオーンの家」を換骨奪胎し、ギリシアのミノタウロス伝説と我が国のくだん伝説を融合させる——このアイデアは、久しぶりに『不死の人』を読み返していた時に唐突に思いついたものである。大まかな構想をまとめる段階では少々手こずったものの、いざ書き出してみると筆が止まらなくなった。それは素晴らしい体験だった。ボルヘスがヒントをくれたおかげであろうか。

(二〇〇八年十二月一二～一五日)